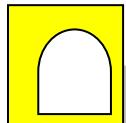


日吉台地下壕保存の会会報



第124号
日吉台地下壕保存の会

戦後71年を迎えて

会長 阿久沢 武史

新しい年を迎えました。今年も引き続き、保存の会の活動にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

昨年は「戦後70年」ということで、日吉台地下壕に対する関心が高まり、慌ただしい一年となりました。春に開催された神奈川県立歴史博物館での特別展、6月の慶應義塾によるマスコミ特別公開などを通して、以前にも増して多くの人に知られるようになりました。見学希望の問い合わせも増えています。日吉の戦争遺跡の歴史的価値と保存の意義をどのように伝えていくのか。見学者と共に何を考え、何を発信していくのか。我々が担うべき責任は、いやがうえにも重くなっています。

戦後70年は、8月15日をピークにして、戦争の記憶や平和への願いが繰り返し語られた年でした。しかし、それもある時期だけの一過性のものに過ぎず、一方でそれに甚だしく矛盾する動きが、国内でも国外でも顕在化した年でもありました。我々はいまどこにいて、これからどこに向かうのか。この国の現在と将来に対する不安を、これほど強く感じた一年はなかったのではないかと思います。

昨年の12月5日（土）・6日（日）の両日、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて、第23回横浜・川崎平和のための戦争展を行いました。幸い天候にも恵まれ、銀杏並木の美しい黄葉をお楽しみいただきながら、成功裡に終えることができました。今回は新たに「みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会」の皆様にもご参加いただき、展示やシンポジウムを含め大変充実した内容になりました。「若者の発表」では、4組の高校生による発表が行われました。開催にあたって多くの会員の皆様から賛助金のご協力をいただき、お忙しいなかご参加もいただきました。この場をおかりして、ご協力いただいたすべての皆様にあらためて感謝を申し上げます。

今回のシンポジウムのテーマは、「1945/2015 戦争遺跡は語る」。70年の時を往還して戦争遺跡をどう語るのか。と言うより、むしろ戦争遺跡が語る声に我々がどのような思いで耳を澄ませ、そこから何を学ぶのか。

こうした真摯な態度こそが、我々が「語る」ことの前提になるだろうと思います。「戦後」を考える際に70年の節目など実は意味がありません。本当に大切なのは「戦後」がいつまでも続くこと、いまを決して「戦前」にしないこと、保存の会の活動は、そのためにあるのだと思っています。

目 次	
<u>巻頭言</u>	戦後71年を迎えて 阿久沢武史 1p
<u>報告</u>	第23回横浜・川崎平和のための戦争展 阿久沢武史 2-3p
<u>報告</u>	未来を切り拓く「若者の発表」 江連恭弘 3-4p
<u>お知らせ</u>	第10期ガイド養成講座始まる 山田淑子 4p
<u>報告</u>	戦跡を巡るバスツアーの報告 遠藤美幸 5-6p
	蟹ヶ谷通信隊について 岡上そう 6-7p
<u>報告</u>	横浜まちづくり塾(田村塾)12月例会で 茂呂秀宏 7p
<u>聞き取り</u>	航空本部地下壕で勤務した女性理事生のお話 福井寿美子さん、中川雪子さん 8-12p
<u>投稿</u>	原まゆみさんからの年賀状の自作詩 12p
<u>報告</u>	海外の戦跡めぐり(1)比・コレヒドール島 佐藤宗達 13p
<u>お知らせ</u>	資料集の発行について 長谷川崇 14p
<u>お知らせ</u>	公開講座「アジア・太平洋戦争末期の日本海軍」 15p
<u>活動の記録</u>	喜田美登里 15-16p

報告

第23回横浜・川崎平和のための戦争展 シンポジウム《1945/2015 戦争遺跡は語る》

会長 阿久沢 武史

第23回横浜・川崎平和のための戦争展は、今回も「日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に」という提言のもと、参加団体による展示や「若者の発表」、シンポジウムを行いました。ここではまずシンポジウムについて簡単にご報告いたします。

戦後70年の節目の年ということもあり、今回は「1945/2015 戦争遺跡は語る」というテーマを設定しました。明治大学教授・明治大学平和教育登戸研究所資料館館長の山田朗氏の基調講演に始まり、その後、参加4団体のパネリストによる発表を行いました。

山田朗氏は、登戸研究所と明治大学生田キャンパスの歴史から語り起こし、登戸研究所と陸軍の秘密戦の実態、開発された兵器、敗戦後の米軍による接收、その後の保存運動と資料館設立の経緯について、わかりやすく解説されました。そして戦後70年を経て戦争体験者が激減する中で、戦争の記憶をどのように次世代に継承するのか、我々が抱えるこの切実な問題について、非常に示唆に富むお話をいただきました。若い世代にとっては、自分が歴史の中に生きている、自分と歴史（戦争）が繋がっているという歴史感覚を持つことが大切で、そのためにもモノ（戦争遺跡や遺物など）から歴史（戦争）を実感することが必要となります。自分が住んでいる、学んでいる、関心を持っている地域に、そこにかつて戦争があったことを知ること、それがすなわち実感を伴う歴史感覚となります。そのために、モノに基づいて「ヒトからヒトへ」——この場合は「戦争を体験していない世代」から同じく「戦争を体験していない世代」に——戦争を語り伝えることが重要となり、そのためのガイドや語り部の養成が必要になる、とまとめられました。

これは、戦争遺跡に関わるすべての団体に共通する切実な問題意識でもあります。そのため期せずして、参加した4人のパネリストの発表の趣旨と重なるものになりました。

日吉台地下壕保存の会からは阿久沢が「〈教育資源〉としての日吉台地下壕—その可能性—」と題して発表しました。慶應義塾高校で毎月1回実施している生徒対象の見学会について報告し、教育的なプログラムとして地下壕見学をどのように位置づけるか、生徒の感想を通して、その可能性を探る試みをお話ししました。

登戸研究所保存の会からは今野淳子氏が朗読劇「ヒマラヤ杉は知っている」を実演され、



来往舎でのパネル展示（2016年12月5日～6日）

子供たちに自分の住む地域の歴史と戦争をどのように伝えていくのかということについて話されました。

川崎中原の空襲・戦災を記録する会からは対馬労氏が「街の人々の空襲・戦災記憶を記録し、語り継ぐ」というテーマで発表され、空襲体験の聞き取り調査、中原区の被災地図の作成、記録集の作成や空襲展の開催、フィールドワークの実施など、やはり戦争の記憶の継承に重点を置く内容となりました。

みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会からは大泉雄彦氏が「中学生

が見つけた、62部隊」というテーマで話され、旧陸軍東部62部隊の調査に、地元の中学生がどのような経緯で関わり、どのように調査を進めていったのか、時系列にそって発表されました。

4人のパネリストの発表が終わり、会場からは高校生を含めた活発な質問や意見が交わされ、さらに深く論点を掘り下げ、参加された方々とともに問題意識を共有することができたと思います。

戦争を体験していない人が、戦争遺跡というモノを通して、戦争を体験していない人に向けて、何をどのように伝えていくのか。若い世代に対する働きかけとして特に重要なのは、「自分自身」に迫る問題として考えてもらうこと、知識を一方的に与えるだけでなく、共に考え、共に歴史を掘り起こしていくこと、そうした姿勢が一番重要であるということを学ぶ場となりました。

報告

未来を切り拓く「若者の発表」

法政大学第二中・高等学校 教諭 江連 恒弘

横浜・川崎平和のための戦争展は、今回で23回目を迎えた。第1回から毎年欠かさず企画されているのが「若者の発表」である。今回は、高校生による授業やクラブ、生徒会活動などでの取り組みが報告された。慶應義塾高等学校2年生2名は、保存の会・阿久沢会長の国語の授業で日吉台地下壕に入った感想を語った。一人は、電灯を消した暗闇のなかで五感を研ぎ澄まして感じたことを、もう一人は、航空部員として空を飛ぶなかで感じる「孤独」を通して、同世代の特攻兵が迎えた最期を想像した気持ちを述べてくれた。実感と想像力をもとに、自分自身に引き付けて考え、伝えようとしたところがとても印象的であった。法政大学第二中高等学校の社会科学歴史研究部2年生4名による「軍需工場のまち川崎と学徒勤労動員」の報告は、自分たちが通う学校と地域の歴史から戦争を考えようとしたものである。旧制法政二中の卒業生への丹念な聴き取りや勤労動員先の社史調査などがよくまとめられていた。地道な調査・研究の積み重ねの上に、戦争を体験した当事者との対話と「地域の目」から戦争を問い合わせ直そうとする試みが伝わる発表であった。桐蔭学園高等学校男子生徒会の1・2年生13名は、創立50周年の今年度、「自然を愛し、平和を愛する国際人たれ」との文



慶應義塾高等学校2年生による発表

言が建学の精神に追加されたことを機に、建学の精神を生かした生徒会活動の取り組みを報告した。靖国神社見学、高校生戦後70年「未来」プロジェクトでの広島の原爆ドーム訪問、登戸研究所や日吉台地下壕の見学、学園祭でのパネルディスカッションなど、意欲的かつ多角的な活動である。平和を維持するために戦争を考え続けることが「後世への義務」であるとの言葉が心に残った。桐蔭学園高等学校女子部の2年生4名によるTEAM P.O.Wの「戦争捕虜へのメッセージ」は、捕虜収容所や捕虜虐待の実態



法政大学第二中高等学校2年生による発表

調査にとどまらず、元捕虜の方々との交流をふまえて研究を深めていった点が特徴的であった。また、彼らが通う学校に歴史文化遺産として残されている横浜地裁「特号法廷」や横浜市保土ヶ谷区にある英連邦戦死者墓地の調査も丁寧になされていた。米国人元捕虜との交流会への参加や手紙のやりとりを通して、戦争の事実に向き合うことが「和解」への一歩となるということを実践した報告であった。

毎年、「若者の発表」は興味深いものが多いが、今回も各報告の中身が充実していたと思う。共同で調査・研究し、ともに「戦争」に向き合い、意見を交えながら発表へと繋げていくというプロセスが丁寧になっていたことと、自分たちの考えを伝えたいという思いが伝わってきたからかもしれない。高校生と会場の質疑も活発になされ、もっと時間をかけて議論してみたいと感じるほどであった。

いま、当事者の高齢化のなかで、戦争を語る「モノ」「証言」といった史料を戦争非体験世代がどのように学び直すかが問われている。さらに、単に戦争の裏返しとして「平和」を捉

えるのではなく、戦争や貧困といった構造的暴力の克服を含めて、戦争と平和の問題を捉える力が求められているだろう。格差が拡大し、貧困が深刻化するなかで、新たな「戦争」が現実味を帯びる時代に入っている。戦後が戦後であり続けるためにも、各々が問題意識をもって戦争の事実に真摯に向き合い、学び考えあう文化を発信して関係を繋いでいくことが大切な意味を持つ。その意味でも、「若者の発表」は未来を切り拓き、希望ある豊かな社会をつくる力になっていると思う。



桐蔭学園高等学校女子部2年生による発表

報告

2016年第10期ガイド養成講座始まる

運営委員 山田淑子

11名（当日は2名欠席）を迎えて、第10期ガイド養成講座が開講しました。講座は1月16日を第1回として第2回2月6日、第3回3月12日、第4回4月9日、第5回5月14日まで、全5回で行います。今回の養成講座は、ガイドの実践に重点をおきました。ガイドを行うに当たって「戦争とは何であるか」を知っていただくために、旧日本海軍の軍艦の元乗組員の方々に体験を語っていただき、ガイドは「何を伝えるべきか」を考えてもらえるような講座の内容にしました。

受講者は、港北区に在住在勤の方が多く、特に自分たちの地域に興味を持ち、まずその一つである日吉台地下壕を知りたいとの意欲をもって養成講座にのぞまれています。

受講された方々が、日吉台地下壕見学会ガイドとして新しい風を呼び込んでくれることを期待しています。



ガイド養成講座初日の様子（来往舎中会議室にて）

報告

戦跡を巡るバスツアーの報告（2015年11月8日実施）

運営委員 遠藤美幸



こどもの国：第2トンネル

毎年秋に、日吉台地下壕保存の会では、戦争遺跡や資料館を巡るバスツアーを行っていますが、昨年は私たちの身近な日吉周辺の戦争遺跡や資料館など5ヶ所を訪ね歩きました。

最初に、日吉と関係が深い川崎市高津区にある海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊跡と耐強受信所（地下壕）を訪れました。蟹ヶ谷通信隊跡は受信専門の通信基地でしたが、現在では昭和初期からのアンテナはすべて撤去され、地下壕も封鎖されて中を見る事はできませんが、案内板がありその場所を確認できました。

二番目は、宮前区の野川神社境内にある慰靈碑を見学しました。野川神社の戦没者慰靈碑には、大変珍しいことに兵士

の戦没者だけでなく子どもを含む戦災被害者の名前と年齢が同時に記されており、当時の戦争の悲惨さと住民の悲しみが偲ばれました。

三番目は、溝の口駅南側の梶が谷の戦災供養地蔵を訪れました。子育て地蔵堂の端にあるため見過ごしてしまいそうな小さな地蔵です。1945年4月から5月のB29のこの辺りの凄まじい空襲で、乳幼児からお年寄りまで多くの犠牲者が出て、肉片が飛び散るような惨状だったと伝えられています。

四番目は、現在の「こどもの国（1965年開園）」にある陸軍田奈弾薬庫です。横浜市青葉区と町田市にまたがる約一キロ平方メートルに亘る敷地の「こどもの国」は、旧日本陸軍の軍事基地でした。ガイドをして頂いた大泉さんの資料によると、約1000人の朝鮮人労働者の強制労働などによって、1941年に日本最大規模の田奈弾薬庫が完成されました。横穴式の弾薬貯蔵庫は敷地内に33ヶ所あって、注意しながら歩くとその数の多さに驚かされます。防空壕も800以上もあるそうです。当時は、弾薬製造の軍需工場、将校や憲兵の宿舎、陸軍兵器学校、さらに労働者の宿舎なども敷地内にありました。子どもの国の正面入口右側の丘の上に、戦時中ここで働かされた元女学生らが平和を祈って建てた石碑があります（1996年建立）。石碑の裏面には「自分たちが作った砲弾がその地球上のだれかを傷つけたのではないかと思うと、とても恐ろしい」というような内容が記されています。戦争の惨劇は、自国民だけでなく他国の人々にも及ぶことを教えてくれています。

最後に訪れたのは、大倉精神文化研究所（現、横浜市大倉山記念館）です。1944年の夏から終戦までの約1年間、戦況の悪化に伴う空襲対策として東京駿河台の海軍気象部の分室が大倉精神文化研究所に移転してきました。



こどもの国：陸軍田奈弾薬庫

海軍気象部分室には、調査班と特務班があり、調査班は千島列島方面の海霧の研究を、特務班は米ソなどの気象通信（暗号文）の解読を主な業務としていたことが最近の聞き取りからわかった。海軍気象部が当時使用していた海図や気象記録簿などは、戦後焼却されずに大倉精神文化研究所の図書カードとして裁断され再利用されて残っています。これらも海軍気象部を知る貴重な資料です。

戦争の足跡は目をこらして意識して知ろうとしなければ、日常の風景の中で見失ってしまうものだと改めて気づかされました。

報告

戦跡バスツアー 蟹ヶ谷通信隊について

運営委員 岡上 そう

日吉台地下壕保存の会恒例、年に一度の戦跡バスツアーで運転士を務めさせていただいた岡上です。保存の会とは創立以来の付き合い、当時はまだ中学生でした。今では40歳になり、二人の娘も小学校で日吉台地下壕を見学しました。今回はあいにくの雨天で参加された方々には、見学場所によってはかなりのご苦労をかけてしまったかもしれません。

最初に向かった蟹ヶ谷通信隊の鉄塔跡では、近年まで残されていた通信用の巨大な鉄塔のあった場所で新井揆博さんに解説をしてもらいました。城址のように案内表示があるわけではないので、解説されなければただの団地の一角にすぎない場所です。いまや住宅地となつた蟹ヶ谷の丘の上に君臨していた巨大鉄塔群も、時代の波にのまれ、その存在の痕跡すら消え失せようとしているのです。

次にその通信を受信していた蟹ヶ谷通信隊地下壕に向かいました。現在は案内板表示と、僅かに見える地下壕の入口（封鎖されていますが）のみが確認できる程度ですが、私が学生の頃は出入りが可能



蟹ヶ谷通信隊の鉄塔跡地近辺

で、友達や寺田さん谷藤さん茂呂さんたちと幾度となく壕内に入り、記録や調査をしました。畑の中に半分埋まっている部分、完全に露出している部分もありました。地下壕のメイン通路（通信機器や発電機が置かれていたあたり）は藪の中にあり、長年溜まった地下水が地下壕と畑を繋ぎ、小川のような沼地状になっていました。地下壕調査には長靴が必須で、ぬかるみに足をとられながら入りました。

日吉台地下壕も同様ですが、傾斜がつけられており、排水や空気の流れを意識して造られたようです。そのため、戦後長い間半分以上も水没している箇所もありました。蟹ヶ谷通信隊地下壕は、私の記憶では山の斜面や山の中ではなく、傾斜地に囲まれた谷戸の平地に造られていた感じがします。戦時中はどのような状態であったのか分かりませんが、少なくとも「地下」というイメージではないのが、私の持っている印象です。

地下壕そのものは、日吉台地下壕に比べて小ぶりでスマート、コンクリートの厚みは同じくらいだったと思います。地下壕内部は通路が狭く、人がひとり通れるくらいのサイズでしたが。通信機器や発電機が置かれていた場所は、数人で作業できるくらいの区分けと広さを持っていました。発電機の台座は日吉台地下壕と同じ感じで、長方形のコンクリート台座が確認できました。コンパクトでスマートなこの蟹ヶ谷通信隊地下壕と、鉄塔を合わせて全体像を見られたならば、きっと相当なリアリティとイメージが膨らんだ事でしょう。

最近は安全のためだからと、手当たり次第に半壊の地下壕や建造物を埋めたり、撤去してしまいますが、これは非常に残念でなりません。歴史というものは肌で感じ取ることによって、心に衝撃や感動を覚え、それが理解と探求に繋がるものだと思うのです。

特に、これからの中世の中を担う若者が大人になるころは、戦争体験者はゼロになり、徐々に警鐘の音は遠退いてしまうでしょう。しかし、戦争遺跡がそのまま残ってさえいれば、最低限、語り部になって歴史は守られると思います。蟹ヶ谷の二か所を見て、そんなことを痛感しました。



蟹ヶ谷通信隊地下壕入り口（閉鎖中）

報告

横浜まちづくり塾（田村塾）12月例会で 日吉台地下壕保存の会から報告

運営委員 茂呂秀宏

昨年末の12月17日の「田村塾」12月例会で、「《横浜の戦後70年記念レポート》日吉台地下壕から見る太平洋戦争と横浜（日吉）の空襲～慶應キャンパス地下に眠る帝国海軍最後の砦からの証言～」というテーマで講師として招請され、有意義な議論の輪に参加させていただきました。当日の参加者には、故田村明氏の弟君を始め、現職の市職員、ボランティア団体のガイド職員、民間会社員など多彩な人々があり、貴重な意見をお聞きすることができました。地下壕が負の遺産であることの意味を、アジアとの関係のみならず、国内においても不合理な戦争の継続によって民間人を含めた多大な戦争犠牲者が生み出されたことについていくことに対する賛意を始め、横浜市としての地下壕の保存の可能性を観光資源として価値に求めていく提案など今後検討していくかなければならない意見も出されました。

※なお、田村塾とは、飛鳥田市政時代企画調整局長に就き、横浜市の町づくりに力を尽くされてきた田村明氏の業績（横浜市の事実上の戦後復興事業としての、ベイブリッジやみなとみらいの埋め立て計画などの横浜六大事業の事実上の発案者）にちなみ、田村氏存命の2001年から、2010年に亡くなれた以後現在に到るまで、横浜市の町づくりについての研究集会を定期的に開催している横浜市民の研究団体です。

戦争体験者の聞き取り

航空本部地下壕で勤務した女性理事生のお話《連載第3回》

福井（旧姓杉浦）寿美子さん、中川（旧姓梶）雪子さん

2013年11月30日聞き取り 聞き手：山田譲、都倉、山田淑子、長谷川、亀岡
イラスト：山田譲

空襲の戦火の中、祖母を亡くす

【中川さんの空襲体験】

山田譲 あと空襲のことをお聞きしたいんですけど、空襲に遭われたんですね？

中川 遭いました。（1945年）2月25日と3月10日です。25日は雪の日でしたけどね、艦載機が来て。

山田淑子 油脂焼夷弾というやつですよね。

中川 2月25日ね。そのときは家の近く（墨田区立川）でも、そんなにたくさんは焼けなかったんですけど。

福井 そうですね、あのときはちょっとだけで、川沿いに焼けたのね。

中川 町会の一部分が焼けたんすけれど。その中に入ってしまったので。でも今考えてみると、25日に焼けたおかげで3月10日は助かったのかなという思いもしています。3月10日は厩橋のおじの家で焼かれ小学校「外手（そと）国民学校」に入ったんですけど、小学校が結局は燃えだして、後ろの人が「早く前の人扉開けて出てください」って。私たちは一番最後に入ったので飛び出して、前にある小学校の隣の公園（若宮公園）の中へ逃げました。昔はおすべり台がみんなコンクリートで、その脇には防火用水がありました。その下に逃げて、それで逃げるときはおじが「バケツと手ぬぐい、タオルは絶対に持てよ」っていうことで、一人一人ブリキのバケツを持たされた。そのバケツで水をくんで、みんなで火の粉をはたいた。その小学校から公園に出る広い通りを、どういうふうに逃げ出したかいまだに分かりません。一歩間違えば、火の粉の中、飛んできた物で命をなくしていたかもしれません。大きな畳みたいのとか、トタン板みたいのが飛んでるんです。それで、本当に私なんか一面の火の粉の中をどうやって抜けたか、今もう全然考えても分かりません。でもおかげさまで、公園に逃げて、公園には人が居ませんでしたので、おすべり台の下へ入って水をくんで、お互いに火の粉を消して、火の収まるのを待ちました。それから歩いて、今度（千代田区神田）須田町におじの親戚があるんで、多分あそこはラシャ屋さんで地下が掘ってあるから、あそこは残ってるだろうからといって被服廠の中を通って歩いて行ったんですが・・・。

福井 被服廠っていうのが、今は分からないんでしょうけど・・・。

中川 関東大震災にあった納骨堂。

福井 今の記念堂です。

中川 で、母たちとずっと歩いて須田町まで行ったんですが、母は関東大震災にも遭っているので、「ああ、今回はみんなが関東大震災で懲りたから、ここには入らなかつたんだね」って。誰も入ってないんです。

福井 あそこでは戦争のときには助かってる。焼けなかつたんだ。

中川 焼けてないんです。関東大震災のときはみんなこう山になっちゃつたんで、だからそれを知ってる人たちは全然入らなかつた。そこを通ってずっと須田町に歩き、案の定ラシャ屋さんは地下室があつて助かり、そこで一晩泊めてもらって。翌日は小石川の親戚へ行って泊めてもらい、4～5日後に埼玉県の母の実家に着いたんですけど。

【福井さんの空襲体験、プールにつかり、おばあちゃんを亡くした】

福井 私は2月には全然遭っていませんから、3月10日だけです。3月10日までは都電で（航空本部に）通っていましたから、東京駅まで来て日比谷までを通っていましたけど。3月10日の日は、（江東区住吉の自宅にいて）空襲になってしまっても割合早くに逃げたのかもしれないんですけど、父も母もやっぱり関東大震災に遭っていますから、父は火には水だっていうことを言ってて、まず後ろの学校「東川（とうせん）国民学校」へ逃げたんですけど、昔は講堂って言ってた、体育館ですよね。木造じゃなかった。立派なあれでしたけど。そこに入つたんですけど、出てきて目の前がプールなんです。そのプールの中へ飛び込みました。プールの中で何時間かを過ごして。だから、私は夢中で下向いてたんじゃないかもしれません。妹は時々顔上げたのかもしれない。顔の辺がずっと焦げてました。髪の毛焦げてました。それで、おばあちゃんも居たんですけど、さすがに居られないからって言って、プールサイドに置いといて、布団を掛けて、上から水を父がよく掛けてました。でも、今度は「お尻が熱いよ」、「頭が熱いよ」、そのたびに掛けてたんですけど、「もうどうしてもたまらないから入れてくれ」と言つて、プールへ入って、プールで死にました。まあ、今思えば、子どもに抱かれて死んだのは幸せなの・・・あの当時ですから、幸せの内じやないかなとは思います。

山田淑子 お幾つぐらいですか？

福井 77でした。寒い盛りです。何時間入つてたんでしょう。何時間燃えてたのかしら。

中川 ずいぶん燃えてたわよ。明け方までずっと。

福井 明け方ぐらいまで燃えてましたし、入ったのは10時かそこいらなんじゃないかしら。

山田淑子 周りが熱いからプールに入つても寒くないとかそういうことはないですよね？

福井 そんなことはなかった。妹がよく言うのは、妹はそのとき中学1年なんです。ここ（胸のところ）から水がスッと入ってくるのだけがよく覚えているって言つています。服の中に入っちゃってね。私は入らなかつたのかどうだか記憶はないんですけど、妹はしきりにそれを言つています。水が流れていくのがよく分かつたって。それで頭も焦げてました。

中川 無意識のうちにこう冷たいものが入つてくるからね。



焼夷弾・爆弾をばら撒くB29の大編隊

【空襲後の避難】

山田淑子 それで、いつごろプールから出たんですか？

福井 それが、明け方なんでしょうけど、周りはみんなもう大きな火事の後だから、熾（おき）がいっぱいですよね、その辺。だから衣類がすぐ乾いてしまったという記憶はあります。おばあさんはプールサイドに置いといたんですけど。明くる日、私たちおかげさまで江戸川区内に地所持つてたんです。田んぼ持つてたもんですから、そこに小作人の人が居たんです。そこの家にまず行くことになって、住吉町から谷河内（やごうち）にあったそこまで歩いて行きました。今の篠崎です。篠崎まで歩いて行きましたけど、父は水掛けるのに一生懸命だったんでしょうと思います。目が見えなかつたんです。妹と2人で抱えるようにして、千葉街道ずっと歩いて谷河内まで。今でも地下鉄の駅で考えてもずいぶんありますね。住吉から乗つて、西大島、大島、東大島、船堀、一之江、瑞江だから、地下鉄で六つ駅ありますよね。

そこをずっと歩いて帰りました。でもところどころで小岩辺りまで行くと水をくれたりなんかしてましたし、目洗ったりしながら。そこまで行ったんですけど、父もその当時は小作米といつても物納じやなくて、金納でしたから、お金でもらってましたから。縁も薄かったという感じがあったんでしょうか。遠慮して泊めてはもらわずに、「妹だけは泊めてくれ」って言って、「子どもだから泊めてくれ」って言って、妹だけはその家に泊まって、あとまた、今思うと鹿骨か小岩辺りの小学校まで・・・またその日のうちに一休みしただけで、焼け残っていた小岩まで歩いて行って、その小学校に避難しました。父は小岩でアパートを探して借りました。

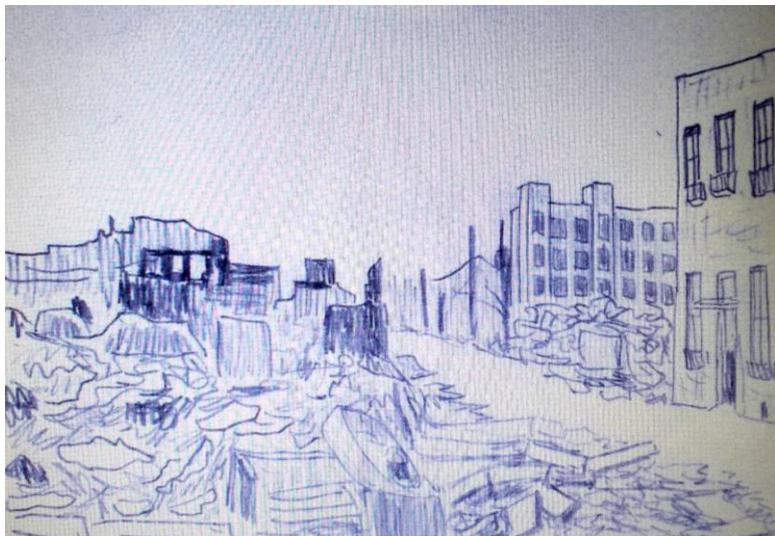
山田譲 そのあと一度、田舎に行って、また戻ってきて小岩の四畳半のアパートから通ったと。ああ、そうなりますね。

山田淑子 すぐ通ったんですか？ 電報が来て。

福井 電報が来て通いました。

【列車の中で機銃掃射に遭遇】

山田譲 田舎はどちらだったんですか？



空襲で破壊された街の様子

福井 田舎は割に近かったです。栃木県の小山です。小山の駅前ですから。そこでもまた空襲で皆さんが出でていています。でもそれ以上疎開する先もありませんし、駅の前に居ました。そこで機銃掃射に遭ったこともあります。中島飛行機に行く途中、ちょうどいいんだそうです。太田にあるから太田に直通だとかという話を聞いたこともあります。で、ちょっとの間だけ小山から通ったんです。そのときに、列車の中で機銃掃射に遭ったこともあります。その機銃掃射は音だけでした。よく人が操縦士の顔も見えるんだってことと言いますが、列車の中でした

し、ただうずくまっていただけで、音を聞いただけでした。畠の真ん中へ急停車しちゃって、なんだろう。そうしたら男の人が列車の中で「空襲になったんだよ」と言っているうちに、バリバリって音だけを聞いて。でもなんにもなく、そのまましばらくして走ったっていうことは、けが人もなく、ただバリバリとやっただけだったんですね。それで日吉に仕事に来ました。

都倉 日吉では空襲っていう記憶はないんですか？

中川 ないです。

山田譲 5月以降だと、ないでしょう。

福井 そのころには、私もちょっと思い出して短歌にして残したんですけど。東京にいて、あちこち焼けてますよね。そんなときにビルがまかれたんです、焼け跡に。米軍からの。それが「東京のトラ刈りきれいにします」と書いてあったそうです。焼け残ったところがポツポツあったのをそうしたんじゃないですか？ 私はチラチラと降りてくるのは見ましたが、中の文章は後から、人のうわさで聞きました。

中川 何しろ下町をずっと円でくるんで落として焼いたそうですからね。逃げ場がないですよね。後で聞きましたけど。

福井 その当時東京駅を、小岩から通ったときだと思うんです。東京駅の北口のドームが、

天井が抜けてるところから星空も見ました。真っ黒だった中で、ひょっと見たら星空が見えたのが、思わず立ち止まって見てたことを思い出します。

【空襲の死者の様子、障碍者の老人を助けた朝鮮人】

中川 だけど本当にあの焼けたときはもう、目は煙で焼かれて見えないし、私なんか靴片方どつか行っちゃってなかったんです。オーバーの裾は焦げてるし、もう普通だったら歩けないような格好して歩きました。焼けだされて親戚を泊まり歩いてるときはそういう格好で。でもあの須田町の通りなんかは、私見たんですが、電車通りに防火用水が結構置いてある。あそこへこういうふうに・・・。

福井 首だけ突っ込んで死んでるって人もずいぶん居ました。

中川 私が見たのは、親子です。大きい体と小さい体がこうコンクリの縁につかまって、そのまま、私の言葉で言うと、昔の埴輪人形、土の塊みたいな感じでこういうふうになって、脇に自転車が焼かれてあって、そういうのは見て。だから気持ちが悪いとかそういうことないです、変な話。防空壕の生焼けとかそういうのは見てないので、土塊りみたいな感じで。想像すると親子かなと思って。中へ入りたかったけれど間に合わなかつたのかなと思って。縁につかまって、泥人形のような、そういう姿は見ました。

福井 それはもう普通にそこらじゅうにありましたね。首だけ突っ込んで亡くなってるのもあるし、防空壕の中へ入りかけたような感じで亡くなってる人、また山になってるのも見ましたし。

中川 私は防空壕の中の生焼けの人は一人も見ていません。下町は結構そういう方がいらしたみたいだけれどね。だから防空壕に入らないだけ良かったのかな、と思います。

福井 そうですね、それは。途中で死んでる人は、手を合わせるとか、そういう感情全然なかつたわね。

中川 そこまで考え及ばなかつた。

福井 ただ真っ黒なマネキン人形が転がってるぐらいにしか思えない、人間の感情じゃなくなっちゃうのかしら。あの日にもう既にサレコウべなんかかなりいっぱいありましたね。公園の中には、死体がいっぱい山になってました。寸暇で一生懸命片づけたんでしょうか。それで、例え着てるものでも、これだけちょっと残っていればとか持ち物でも、いくらかでも手がかりになるようなものがあればというような人が、こうズラッと並んでました。もうその中も、私も知ってる人が居ないかしらというんで持つてみた覚えもありますね。プールも、焼け落ちてから私のいとこが栓を抜いたんです。自転車はあり、布団あり、中で死んでる人も居ましたし。だけどそんな中で、いい話もあることはあるんです。すぐ裏の人で、家作も5、6軒持つてるような金持の家です、その当時としては裕福な人。だけど、おじいさん、両足ないんです。隣に居たその当時朝鮮人と言ってましたけど、その人がおぶって学校まで逃げてくれたんです。ところが、そこのおじいさんのおばあさんと娘は、先に逃げちゃってたんです、自分の親を置いて。そのおじいさんを、隣の朝鮮人の人がおぶって学校まで逃げてくれたんです。だから悪い話ばかりではないところもあるわけです。それでおじいさんを2階まで連れていってくれたんですって。だけど、その2階で、下のコンクリが焼けてくるでしょ。すると、人間がフライパンで炒られてるみたいだったっていうんです。それでバタバタ死んでいくのを見ると、とっても見てられないで、自分は窓から飛び降りたんです。そしたら、窓から飛び降りたら、校舎と外の塀があって、その間は既に焼けちゃった後だったんです。早くに焼けちゃったんで、人間の屍になってたんです。だからそこの柔らかいところへポカンと落ちちゃった。それで助かった。そういう人も居るんです。当時は、朝鮮人は冷たいとか、どうとかって言うけど、自分の親も置いて逃げちゃった人なのに、朝鮮の人に助けられてるって話もあるんです。

山田譲 で、その方は助かったんですか?

福井 朝鮮の方の、その後は分かりません。

山田譲 おじいさんの方は。

福井 おじいさんの方は助かったんです。それで、柔らかい所へ落ちたからだろうって。やけどはしてました。亡くなったのは22~23年ごろかな。

山田譲 じゃ、戦火をくぐり抜けた。

福井 そうですね。

福井寿美子さんの短歌 空襲の戦さ火の中で

(戦中) 戦さ火の壕の中にて祖母の声 「南無阿弥陀仏」と怯えいましき
戦さ火に逝きしうからら野に焼けり み骨のあるを幸と思えど

(昭和20年5月頃) 「東京のトラガリ綺麗にします」とぞ 撒かれしビラを残土に仰ぎし

(宇都宮線) 急停車の列車にあびし機銃掃射 間々田あたりか十八才の春

(6月頃) 戦さ火に東京駅舎黒々と 抜けしドームに星空仰ぎし

(8月15日 日比谷公園にて) 公園の銀杏並木に銃置きて 兵憩い居き終戦日の朝

(戦後) 夏の夜に爆(は)ぜる花火を厭うわれ 焼夷弾に似しと心さびしく

(猿江公園) 戦さ火の屍幾万やまと積み 傀びつつ公園の野球場に佇つ
八時十五分倒れし箪笥に助かるも 被爆せし友文絶え久し

(旧中川の灯籠流し)

川風にゆらぐ灯籠戦さ火に 怯え逝きにし祖母の靈かも
「お祖母ちゃん又きたわ」と独り言 「今幸せです」と灯籠流す
戦さ火に怯え逝きにし祖母の齡 喜寿を穩しくわれは迎えり
わが街に高射砲陣地ありしさえ 想い出消すまで車行き交う

《元日吉通信兵保坂初雄さんの娘さん原まゆみさんからの年賀状の自作詩》

——運営委員への年賀状を原さんの了解を得て掲載いたします。——

二〇一六年
元旦

地下壕は無言 黙つて伝える戦争と平和
それが地下壕の祈り 伝えら我を問う
七十年のタイムトンネルを経て
父の足は再び地下壕を踏み
漆黒の時空に見えないものを凝視する

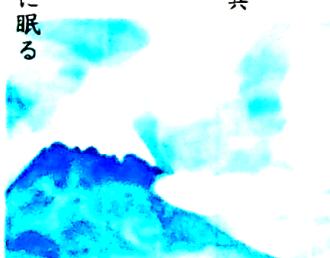
今は昔 横須賀海軍工廠の工員となり
二等巡洋艦「能代」航空母艦「雲龍」の造船
しかし今は、閉ざされた米軍基地
軍艦が跋扈し尋ねる言葉は封印
敗戦の匂う戦禍は進み
海軍に志願し連合艦隊司令部通信兵
トラック島行きの旗艦「大淀」に乗船するも
鹿屋基地からの特攻出撃も傍受
あれから七十年
壕は今も慶應大学日吉校舎地下に眠る

昔語りが粘つこい
聞き流してきたが もう卒寿
父の昔を尋ねる旅をしよう

タイムトンネル

迎春

年賀状
アーチ
かとう
こだま
ます。



**報告 海外の戦跡めぐり(1) フィリピン共和国・コレヒドール島
運営委員 佐藤宗達**



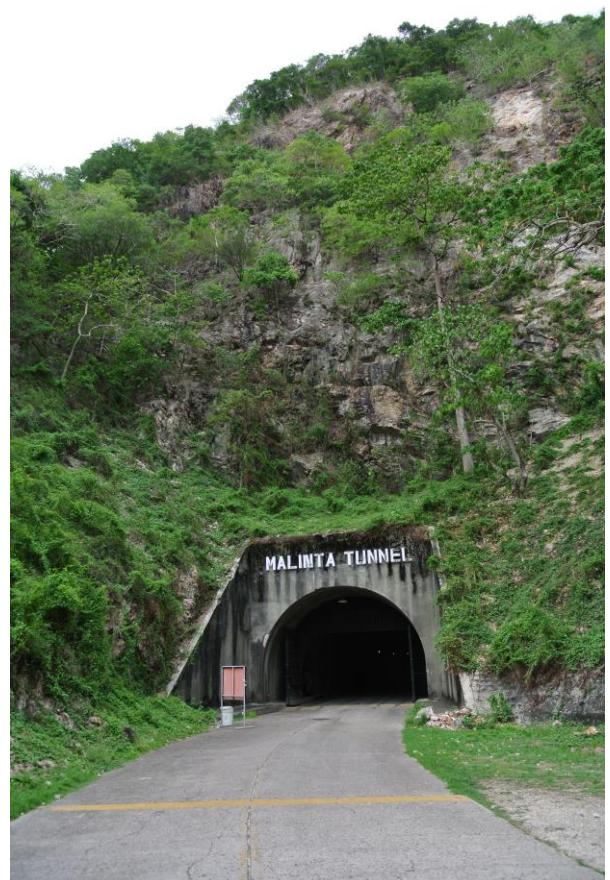
比島・コレヒドール マリンタトンネル案内図

ルソン島マニラ湾の入り口に浮かぶ島：コレヒドール島はマニラを守る拠点としてスペイン統治時に王室代理人(Corregidor)を置き入国管理、徴税などをおこなった。1898年の米西戦争で米国が勝ちフィリピンを統治、1902年に軍事基地がおかれ戦略上の要衝となった。また戦略兵器・物資の貯蔵庫としてマリンタ・トンネルが掘られた。島の売店で買ったガイドブックによれば 1922年のワシントン条約はすべての軍備力に制限を加えていたのでこの時期にマリンタ・トンネルを堀つたとのこと、1932年に完成している。太平洋戦争

が始まると米比軍はマニラでの流血を避けバターン半島で守りに入りコレヒドール島に司令部を置いた。日本軍の進撃によりバターン半島が制圧され、バターン半島から島への給水が絶たれ苦境に陥り、マッカーサーはコレヒドール島から”I shall return” の言葉を残して豪州へ脱出、1942年5月コレヒドール守備隊は降伏した。そして約3年後の1945年2月、米軍がコレヒドール島を攻略、再占領した。

現在のコレヒドール島は米軍の基地の建物の残骸、砲台が点在、マリンタ・トンネルも見学可能でマニラから日帰りツアーがあります。コンクリートは50年経つと劣化が始まるそうで、築70年の日吉台地下壕よりも先に造られたマリンタ・トンネルがどうなっているか見に行きました。

メイン通りは長さ約280メートル幅約7メートル、天井も高い。物資を運んだトラックが出入りできる大きさです。左右には枝道があり兵舎、病院、倉庫がありました。一部の枝道では天井が墜ち、鉄柱で支えている部分もありました。やはり90年も経てば持たないのでしょうか。またガイドさんがしきりとアサノセメントと云うので浅野セメント沿革史を見ましたら巻末の資料に大正11年(1922)マニラ出張所開設、昭和6年(1931)閉鎖とある。また輸出高の表で比律賓向け、1920年~1930年大量に輸出しております。本文には輸出に関する記事はなく、この2点がマリンタ・トンネルに関連するのはどうかわかりませんが全く無関係ではなさそうです。



比島・コレヒドール マリンタトンネル入り口

お知らせ**資料集の発行について****“日吉は戦場だった”～三度にわたる日吉の空襲の記録～**

2015年11月23日 副会長 長谷川 崇

「日吉台地下壕保存の会」も今年で発足以来26年になりました。その間私達は地下壕見学会を主体として、戦争遺跡保存のために数々の行事のご案内をさせていただいております。

戦争遺跡保存ネットワークの会員として、毎年全国大会に参加をして保存に関する発表をし、また、川崎登戸陸軍研究所保存の会とも連携を保ち、毎年平和のための戦争展を開催しております。

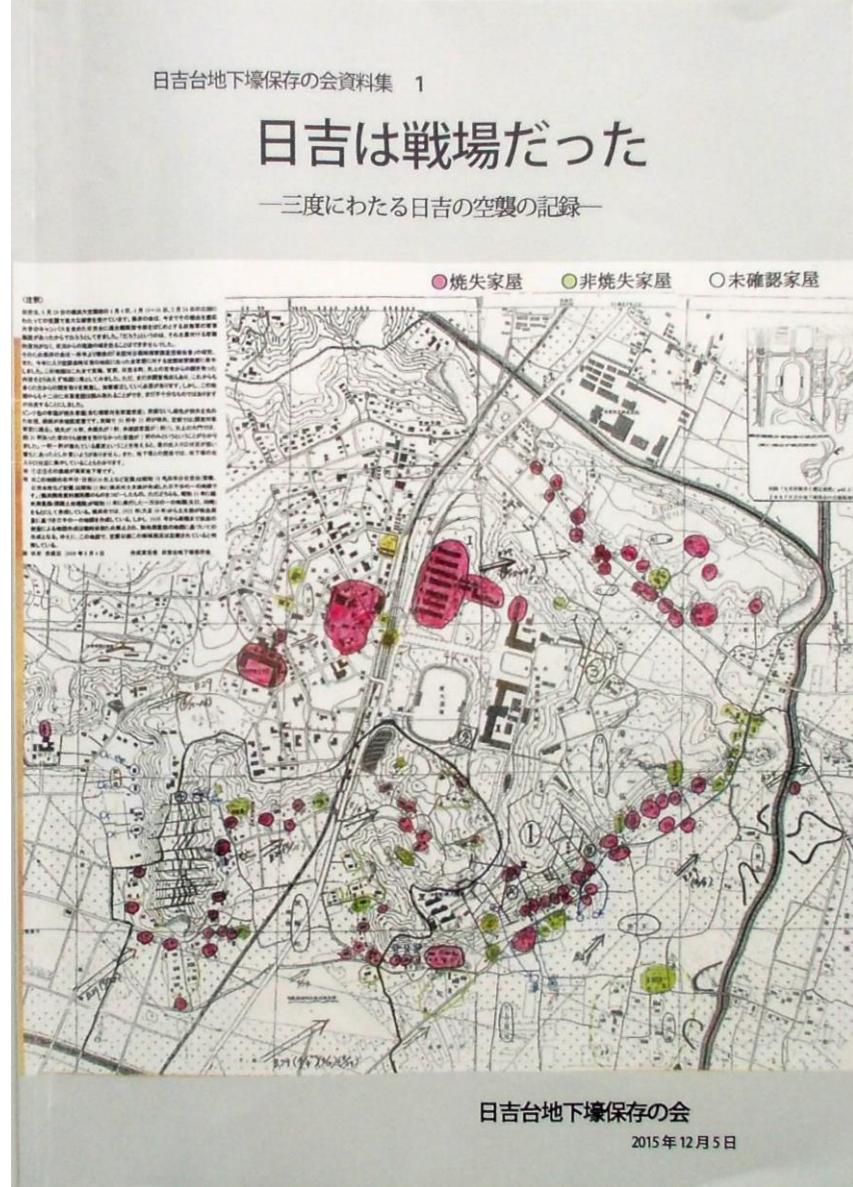
今年は戦後70年の節目の年ですが、戦争体験者が段々と少なくなりつつあり、色々な戦争体験を私達が正しく次世代に引継がなければならないと思います。

此処日吉一帯も1945年4月4～5日、15～16日、5月24日の3度にわたるひどい空襲によって大きな被害を被りました。2008年に保存の会はこの日吉の空襲の被害実態を明らかにすべく、当時の空襲経験者を中心に被害状況に関する聞き取り調査を実施しました。その結果、かずかずの内容を知ることができ、その調査結果は大変貴重なものになりました。私達はこの調査で知った知識を地下壕のガイドの内容に組み込み、見学会の皆様にお伝えしております。

今回、地下壕の見学者のみならず広く地域の人々にも日吉の空襲について知りたいと、この調査結果を「日吉台地下壕保存の会資料集1」としてまとめました。活用していただければ幸いです。

最後に、この日吉の空襲被害実態調査に協力を頂きました地域の11名の方々（すでに故人となられた方4名を含め）には厚くお礼を申し上げる次第です。

**額価 ¥300
現在増刷中**



お知らせ

第10回吉台地下壕保存の会 公開講座 『アジア・太平洋戦争末期の日本海軍』

講師：吉田 裕（よしだ ゆたか）氏（一橋大学大学院社会学研究科教授 日本近現代史）

日時：2016年3月19日（土）午後1時～3時

演題：『アジア・太平洋戦争末期の日本海軍』

会場：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

主催：吉台地下壕保存の会

★参加費無料 事前予約不要 どなたでも参加できます。

講演内容：今年の公開講座は、一橋大学教授の吉田裕氏をお迎えし、アジア・太平洋戦争の日本海軍について、その組織的特徴や作戦思想などについてお話しいただきます。海軍と日吉に置かれた連合艦隊司令部について、じっくりと考える一日にしたいと思います。

講師プロフィール：

1954年埼玉県生まれ。東京教育大学文学部史学科卒業後、一橋大学大学院で日本近現代史を専攻する。1983年より一橋大学で教鞭をとる。

主な著書：『昭和天皇の終戦史』岩波新書 1992年、『日本の軍隊』岩波新書 2002年、『日本人の戦争観』岩波現代文庫 2005年（原著は1995年刊）、『アジア・太平洋戦争』岩波新書 2007年、『兵士たちの戦後史』岩波新書 2001年 他多数



2015年12月16日 慶應義塾高校見学会



2015年12月21日 見学会（日吉南小学校6年生）

★活動の記録 2015年11月～2016年1月

- 11/8 戦跡を巡るバスツアー 参加者 27名
- 11/10 会報123号発送 (来往舎205号室)
- 11/12 地下壕見学会 南会 (横浜南地区県立高校校長OB会) 17名
- 11/13 運営委員会 (来往舎205号室)
- 11/19 平和のための戦争展横浜・川崎実行委員会 (法政第二高校教育研究所)
- 11/23 ガイド学習会 (菊名フラット)
- 11/25 地下壕見学会 竹山文化大学 16名
慶應高校見学会 30名
- 11/28 定例見学会 60名
- 12/3 地下壕見学会 日吉台小学校6年生・先生 101名
- 12/4 第23回横浜・川崎平和のための戦争展準備 (来往舎イベントテラス)
- 12/5～6 第23回横浜・川崎平和のための戦争展開催
展示・若者の発表・シポジウム (慶應義塾日吉キャンパス来往舎)
☆日吉台地下壕保存の会資料集1 「日吉は戦場だった一三度にわたる日吉の空襲の記録」発行
- 12/8 運営委員会 (来往舎205号室)
- 12/9 地下壕見学会 港北区役所職員研修 20名
- 12/10 地下壕見学会 ゆうコープ野庭平和グループ 16名
- 12/15 平和のための戦争展inよこはま実行委員会 (神奈川県民センター)
- 12/16 地下壕見学会 平和を考える茅ヶ崎市民の会 13名
慶應高校見学会 29名
- 12/19 定例見学会 65名 (横浜人権擁護委員会他)
- 12/21 地下壕見学会 日吉南小学校6年生 137名
- 1/13 定例見学会 37名 (大学慶應商学部OB他)
- 1/16 第10期ガイド養成講座第1回 (来往舎 中会議室)
- 1/18 運営委員会 (来往舎205号室)
- 1/23 定例見学会 51名 (新婦人の会他)・ガイド養成講座受講者8名
- 予定**
- 2/10 会報124号発行 (来往舎205号室)

☆定例見学会について

2016年1月から定例見学会は毎月2回実施しています。

原則として、毎月第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分

◎ 2/10・2/27・3/9・5/11 は締切りました。

◎ ☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

◎ お問い合わせは見学会窓口まで **TEL 045-562-0443** (喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里:横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報	(年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会	郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 阿久沢 武史	(加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会	